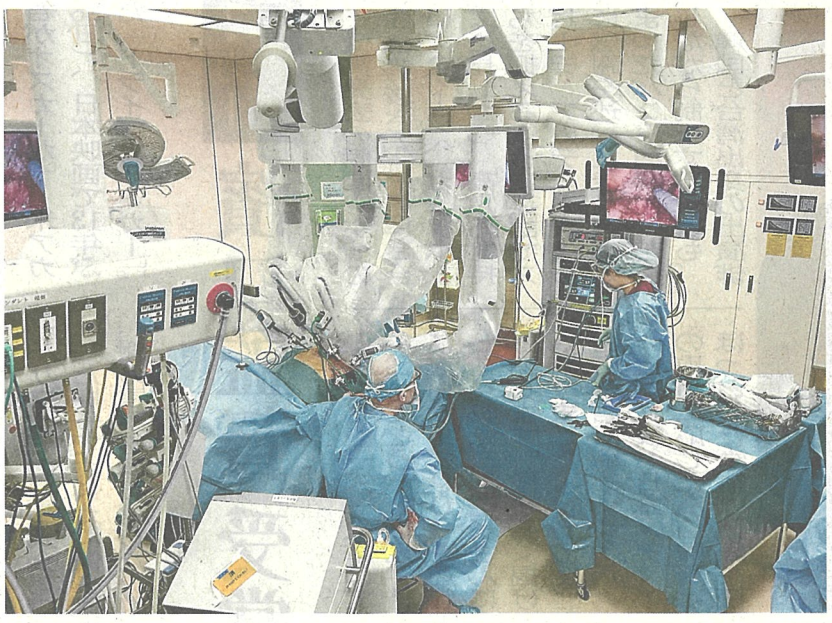
令和４年３月29日　北日本新聞

ロボで食道がん手術

精度向上 負担軽減

県立中央病院（川端雅彦院長）は、手術支援ロボット「ダヴィンチ」による食道がん手術を始めた。食道がんは消化管の中でも難しい手術とされ、ロボットアームを使うことで精度が高まり、患者への負担を減らせる。保険が適用される。北陸３県では、富山大付属病院などに次いで３施設目で、大学病院以外では初めてとなる。（藤田愛夏）

県立中央病院「ダヴィンチ」使用開始



ダヴィンチを使った食道がん手術＝県立中央病院（同病院提供）

食道がんは、国内で年間2万人以上が診断される。がん検診で早期に発見されることもあるが、自覚症状が出てからでは既に進行していることが多く、年間1万人以上が亡くなる。

手術では、食道を切除するほか、胃を持ち上げて食道を再建し、つなぎ直す処置を行う。消化管の中では最も手術が難しく、患者への負担も大きいとされる。

同病院では従来、胸や腹に小さな穴を開け、カメラや器具を入れて行う胸腔鏡手術と腹腔鏡手術で対応し、がんの状態によっては、開腹手術も組み合わせて行ってきた。

ダヴィンチによる手術は、これまで胸腔鏡と腹腔鏡を用いていたケースで実施する。胸や腹の小さな穴からロボットアームを入れ、高画質のモニターで確認しながら操作する。手ぶれがないため、近接する血管や神経などを傷つけず、病変部をより確実に切除できるようになり、安全性と根治性が高まった。

今後は、年間20件程度の食道がん手術のうち、15件程度でダヴィンチが活用できると見込む。担当する食道外科専門医の柄田智也外科医長は「従来以上に手術を安全にできるようになり、患者へのメリットは大きい」と話している。